

## 近年の国学研究

はじめに

本稿は、近年の国学研究動向を概観し、研究史の含む問題点を提示、今後目指すべき研究のあり方を模索しようとするものである。周知のように、国学という学問領域は、古道学、文学、言語学、歌学方面等、多岐にわたる。いわゆる「国学の四大人」はじめ、後世の人間が研究对象としてきた「国学者」も多数存在するのであり、多方面の学問領域から研究がなされているのが現状である。本稿では紙幅の都合で、国学者に関する近年の個別的成果を全て取り上げることとは不可能であるため、日本思想史学、歴史学関連の研究に限定し、篤胤国学を軸に

近年の研究動向について論じていくこととする。

星山 京子

## 一 民俗学的視点

戦後、国学を国粹主義的な皇国史観とは異なる立場から、その学問なり思想なりを再評価しようとする研究が生み出されたが、政治思想的視点から、思想の諸観念を分析し、国学の社会的機能を解明しようとする研究が、一時期、主流であったように思える。<sup>1)</sup>

しかし、七十年代に入り、相良亨氏が折口信夫の一九四二年（昭和十七）の講演「平田国学の伝統」の中で、篤胤の妖怪、神霊、来世への研究を重要視し、柳田国男の系譜に連なる日本民俗学の先駆として、篤胤学を再評

備すべきであるとした提言を紹介したことが、国学を民俗学との連関の中で捉え直す新たな研究の突破口となった。国学思想、とりわけ篤胤国学が民間で信じられていた妖怪、来世、神霊等を主たる研究対象としていたこと、死後の靈魂が赴く場所として、独特な幽冥界の概念を構築していったことに注目、民俗との関連から、国学の歴史、思想史的意義を論究しようとするものである。こうした一連の研究は、狂信的国粹主義の思想的根拠、もしくは封建補強のイデオロギーと見なされることの多かった国学理解に対し、根本的な見直しを迫るものであった。

こうした国学研究の新傾向の流れを受けて、沼田哲氏は、篤胤国学と民俗との関わりを重視、化政期江戸の市井の発想ととらえた。化政期江戸の市井社会は、いまだ容易に解き明かせない怪異現象に満ち満ちていたことを指摘、天狗や妖怪を執拗に探究し続けた篤胤の精神態度は、妖怪や物怪を信じる化政期江戸市井に生きた庶民の心的状況を共有するものであるとした。篤胤の思想を江戸市井の民の発想を論理化したものと見る見解は、飛鳥井雅道氏の議論を継承するものであり、櫻井進氏にもみられる。<sup>4</sup>

また安蘇谷正彦氏は、篤胤が宣長の死後の靈魂は皆黄

泉の国へ赴くとした説を否定し、独自の死後観、幽冥界を構築した思想的要因について、再検討を加えている。篤胤の起点となったものは、この世とあの世を近いものとして見る、民衆社会に長い間、息づいてきた「死後の世界への親しさ」であった。「民間信仰的な死後観」を基盤として、篤胤は独自の幽冥観を構築していったのであり、その結果、それは土俗の死後観と親和性の高いものとなったとする。

近年では、篤胤の来世や靈異、靈性などへの熱烈な関心を取り上げ、篤胤を「靈学」の創始者と見なす、鎌田東二氏の研究、「事実実証主義的」な死後の世界の探究を、現代の臨死研究の原型と評価する小池英氏の研究などがある。民俗学との連関の中で篤胤国学の意義を新たに見いだそうとする研究は、皇国史観的視点、および政治思想史的視点からはいずれも取れない諸側面を明らかにし、新たな国学研究の流れを作ったと言えるだろう。<sup>5</sup>

## 二 復活する過去の国学像

しかし、九十年代になると、国民国家論の影響もあってか、篤胤国学を近代天皇制や国家神道の前提と見る研究が多く出された。佐藤孝敏氏は、国学者の「日本」に

対する呼称について言及、特に篤胤が「日本」という呼称を嫌い、天皇あつての国であること、「皇国」と書くことの必然性、ことさら天皇存在の「特殊」性をあらわした呼び方にこだわっている<sup>10</sup>と指摘、国学者は、万国の中での日本の「特殊性」「独自性」を主張、「特殊な国日本」<sup>11</sup>を唱道するとともに、日本を全世界的な視野から位置付け、皇国意識の普遍化を目指したとする。こうした動きを近代の皇民化運動と重ね合わせ、「後の時代の前触れが国学者の「国」意識に認められる」と結論づけている。また桑原恵氏は、篤胤は土俗の信仰や習俗を研究対象としながらも、しかし結局、それらは、天皇制イデオロギーの中に吸収される結果となつたと述べる。さらに外国の神々や外国文化の起源を日本に求めた主張についてふれ、「明治初期の、文明化と天皇制イデオロギーとの矛盾に満ちた一体化の試みは、すでに篤胤の問題意識のなかにあつた」と、近代天皇制を根底から支える論理が既に篤胤の中に胚胎しつゝあつたのであり、国学者は、明治以降、政治の表舞台から姿を消したが、その思想は、天皇制イデオロギーの中に綿々と生命を保ち続けた、とする<sup>12</sup>。

こうした一連の研究は、土俗の宗教意識や民の日常の倫理を自らの思想に取り込み、これを体系化しようとし

た——端的に言えば、篤胤が民俗をターゲットにしたことを認めながらも、最終的には、天皇制イデオロギーの中にそれらは吸収されてしまつたと結論づけているのであり、篤胤国学を、近代天皇制に先駆する思想ととらえるものである。しかし、これらの議論は、国学が近代日本において、結果的に果たすに至つた社会的機能を言及するものであり、最初にふれた国学思想の中に、下から政治を支える論理を抽出しようとする、松本三之介、田原嗣郎、丸山眞男らの見解と基本線において、一致しているように思われる。

幕末国学、特に篤胤没後の平田国学の研究者である宮地正人氏は、「義父篤胤の教学（＝「皇朝古道学」）を広く全国に普及しようとする鉄胤の尋常ならざる熱意と、そのために発揮された卓絶した組織能力なしには、平田国学は幕末期、強力な思想集団としての実態をまったく保持し得なかつたであろう<sup>13</sup>」と、篤胤国学が、幕末、全国に急速に広まった背景には、養子、平田鍊胤（二七九—一八八〇）の力によるところ大であることを強調している。分かり切つたことと言われるかもしれないが、篤胤の国学思想と篤胤没後、地方の農村地帯を中心に普及展開した篤胤没後の国学、そして近代以降の国学は同じではない。国学の社会機能論も重要な研究視角であると

思われるが、思想の内在的理解と、それが後の日本社会において、結果的に果たすに至った社会的機能とは、厳密に区別して議論されるべきと考える。

宮城公子氏は、「明治期の神道国教政策の前提としての平田派国学、あるいは近代の国家神道の姿から遡及した篤胤像<sup>16</sup>」という近年、復活しつつあるイメージに疑問を投じる。氏は、「庚申信仰・修験道、その他、篤胤の目に入る限りの雑多な習合系の民俗信仰も「淫祠」「邪教」とよび、記紀の神々での言い換えを主張<sup>17</sup>」したことに言及、「篤胤のこうした志向は民俗信仰の世界を挙げて記紀神話の世界に統合しようという強烈な「国家主義的」性格と規定すべきものであるかもしれない。(中略)篤胤にこうした側面があることは否定できない<sup>18</sup>」と篤胤国学の内包する「国家主義的性格」について、一旦、承認しながらも、しかし「篤胤は神道による祖霊祭祀の体系化に成功しているとはいえず<sup>19</sup>」、「篤胤の民俗的世界への貪欲な関心はしばしば、それを叙述するのが自己目的であるかに思われるものだった。篤胤には神々の「神徳」を説くより、「神隠し」にあつた体験、ある「妖魅」の姿を叙述する方がはるかに興味を引く事柄だった<sup>20</sup>」と指摘するのである。確かに霊魂や妖怪、死後の世界を实在のものとして信じ、異常なほどの探求心をもってそれらを

解明しようとした篤胤の心性は、「国家神道の祖型」という枠組みではとらえきれない要素を多分に含んでいる。

さらに氏は、篤胤学と祭政一致、神道国教化を目指した大國隆正を代表格とする多くの「平田派」と呼ばれる幕末国学者との思想的差異についても、こう述べるのである。「死後の霊魂の行方への関心から、幽冥界の主宰者大國主神、あるいは両産霊神、天之御中主神へと宇宙論を展開した篤胤とは相当に隔たりがある。(中略)篤胤の民俗的世界への貪欲な関心から掬い上げられた事象の中には、記紀神話からはみ出すものが多かった<sup>21</sup>」と、篤胤国学と篤胤没後の社会において展開、発展した幕末国学のもつ性格の異質性を強調している。

### 三 国学の「時代性」「都市性」

最近の国学研究の一傾向として、国学者の思考や学問的活動の特質を「都市性」との関連の中で再検討しようとするものがある。小野将氏は、宣長の伊勢松坂、京都での都市体験を取り上げ、特に、名所巡り、年中行事、四季の行楽等、いわば王朝文化を肌で実感することが可能であった大都市京都での体験が、宣長の貴種観や王朝文化に対する崇拜を確固たるものとし、その思想形成に

重要な役割を果たしたことについて論究している。氏は、宣長以外の国学者に關しても「他の多くの学者・思想家の生と思考にも、近世の都市性が色濃く刻印されていると思われる」と述べ、「都市性」という観点から、国思想の特質を議論する必要性を主張する。岸野俊彦氏は、本居派国学の名古屋における展開を「都市の国学」とし、いわゆる「草莽の国学」に対峙する概念として規定している。しかしこの場合、都鄙二元論的な議論は果たして有効だろうか。例えば、江戸市井社会で誕生したが、後に地方の村落社会において展開、発展した篤胤国学は、「都市性」と「地方性」の双方を合わせ持つていていると思われ。 「都市性」と「地方性」双方が思想形成の中で有機的な相乗効果を見せ、「国学」という特異な思想を形成したと考えるべきと思われる。

「都市性」に着目した研究が行われる一方、国学思想の特質を「時代性」との連関の中で再解釈しようとする試みも行われている。山下久夫氏は、従来、「自国中心主義」もしくは「誇大妄想」と糾弾されてきた、中国の三皇五帝等、外国神の源流を日本の神々に求める篤胤の言説について再検討を加え、これを近世後期という特殊な時代状況における一つの「知」のあり方としてとらえる見解を提示している。外圧や西洋學術の波が押し寄せ

る変化を実感しながら、神々の世界を西洋合理主義によって再解釈しようとする知的欲求と、日本のアイデンティティ確保のためにも西洋合理主義をもってしても到達できない神の領域「神理」を信じる心性が篤胤の中に共存していたのであり、「近世後期に生きる篤胤は、こうした知的緊張を味わうことでパワーを得ていたのではないか」と述べている。

近世後期という特殊な時代性との関連の中で、篤胤国学の本質を見いだそうとする研究は、遠藤潤氏の議論にも見られる。氏は、いわゆる三大考論争において、記紀を典拠とした「神代の事蹟」と経験実証主義に基づく西洋合理主義が、国学者の中でどう論理的な相剋を見せ、展開していったかについて論じている。服部中庸や篤胤の天体をめぐる議論の中に「〈事実〉の究明のためには経験科学も援用しようとする、新しい方向性が生じた。このことよって、西洋の合理主義的学問と神代史についての実体的理解は一時的に親和性の高いものとなった」とする。そして国学者による一連の論争を「神代の理解をめぐって生じた大規模な地殻変動とその現象の多様性としてとらえる必要がある。それは、より大きな文脈からみるならば、日本社会において〈近代〉なるものが頭をもたげる、まさにその現場なのである」と述べ、

天体をめぐる議論の中に、近代的思考様式の萌芽を見いだすことで、国学の思想的意義を読み取ろうとするのである。こうした研究は、すでにふれた宮城氏同様、篤胤国学を「近代国家神道の前提」と見る一連の研究とは異なるイメージを与えてくれるものであり、学問的示唆に富んでいる。

国学の思想形成と西洋学術との関連性は、戦前の伊東多三郎氏や戦後の鮎澤信太郎氏、ドナルド・キン氏の論考において既に指摘されているが、この方面の研究はさらに深められ、最近、新たな展開を迎えつつある。二〇〇四年、国立歴史民俗博物館において「明治維新と平田国学」展が開催され、これまでほとんど未公開であった平田家伝来の約一万点もの「平田国学関係資料」が公開された。その内容は篤胤自身が収集したロシア関係資料、ロシア研究の内容、『気吹舎日記』未公開部分、気吹舎の出版活動、全国に広がった門弟たちの活動や情報センター的役割を示す資料など多岐にわたり、国学研究全体において、極めて重要な資料であるといえるのである。篤胤自身の蘭学の素養は、これまでの研究でも指摘されているが、「平田国学関係資料」の中でも、篤胤が一八〇〇年代初頭、当時、幕府最大の懸案事項であったロシアの南下政策に関心をもち、ロシアについて

学んでいたことを示すおびただしい数のロシア関係資料は特に興味深い<sup>29)</sup>。これら新出資料の研究がさらに進められ、日本思想史研究においても活用されれば、従来の篤胤国学の抜本的な見直しとなるであろうし、ひいては新しい国学像の構築にもつながるであろうことが期待される。

宮地正人氏は、篤胤国学を思想的枠組みにおいてのみ議論することに対し、強い不満の意を表明している。篤胤が所蔵していたロシア関係資料は、そのほとんどが篤胤が江戸に出て間もない若年期に収集、もしくは著されたものである。『靈能真柱』等の主著が成立する以前の思想形成期に、ロシア危機に大きな関心を寄せていたことは、篤胤国学の形成に「時代性」が何らかの影を落としていると考えられる。日本思想史研究においては、テキストの緻密な読解、分析が重要であることは言うまでもないが、「時代性」や「都市性」という観点から、思想の特質を解明することも、今後の研究において必要だろうと思われる。

#### 四 国学全体を扱った研究

「明治維新と平田国学」展と同年に、川崎市民ミュー

ジウム、四日市市立博物館において、「二十一世紀の本居宣長」展が開催され、また昨年、一般向けの国学入門書『やさしく読む国学』が刊行された。<sup>31</sup> こうした一連の動きは、国学に対する一般への関心の高まりを示しているとともに、学界における実質的な研究の活性化にも結びついていると言えよう。現に、ここ数年、国学全体を扱った本格的な研究書が次々と刊行されている。

前田勉氏は、ナショナル・アイデンティティという観点から、近世国学を捉えようとし、国学思想が置かれていた各々の特殊な社会状況との連関の中で、その思想的意義を理解することに挑んでいる。商品経済の発展、対外危機といった内憂外患を抱える特殊な時代背景の中、「この世の不条理感、不条理の中に生きざるを得ない悲しさ」を抱えた「凡人」の希望の光として天皇は登場<sup>32</sup>し、篤胤が講釈などで「神胤」観念を唱道したことにについては、「独自の神話解釈をてこに貴種のみならず天下万民が天皇の系譜に連なるという新たな神話を創出し、身分や階級を越えた「日本人」という観念を創出することによって、草莽の志士たちの政治参加を促すイデオロギーとして大きな役割を果たした<sup>33</sup>」と述べ、幕末の尊王攘夷運動を根底から支えた思想として見るのである。氏は宣長も篤胤も競争社会における「敗者」であつ

たが、「天皇へ服従することによって、偽装的な「強い」自我を獲得した<sup>34</sup>」とする。

確かに故郷秋田を脱藩後、篤胤の江戸での学問活動は出版費用にも事欠くほど、常に貧困との戦いであったと言われており、何度か仕官を願い出るがかなわず、最後は江戸を強制退去、失意のうちに世を去った。しかし身分的、経済的に不遇であったとしても、幽冥界や鬼神妖怪の実態を貪欲にどこまでも知ろうとする学問態度は、ポジティブなモチベーションに突き動かされたものであったと言えるのではないだろうか。また比較的裕福な村落指導者、宮負定雄（一七九七—一八五八）らに代表される草莽の国学も「弱者」「敗者」の思想であるのか。国学が「弱者」「敗者」の思想であったと言えるのかどうかについては、さらなる検討の余地が残されているように思われる。

国学を「政治性」から切り離し、その歌論の分析から国学の内在的理解を目指した研究書、『国学の他者像』の著者、清水正之氏は、国学のもつ「私秘性」に着目する。本来の国学は、日常生活において極めて「差異」に敏感な思想であり、繊細な感性をもって、「他者」と「自己」との関係を細やかに探ることこそが、国学の目指した思想的課題である、とする。「日本」という自国

意識を執拗に強調する側面、諸外国と比較し、独自の文化、「皇国」の存在を強調する国学のもつ側面は、現代的視点から見れば、否定的に扱われがちなものであるが、その元をたどれば、国学が日常生活において「他者」との差異に極めて敏感な感覚を持つものであるがゆえに生まれたものなのである。「他者」とは、共同体内部の他者、対面的な他者であり、中国等の異国・異文化をもつばらさすわけではない。その意味での、問柄に立ち現れてくる他者性とはなにかがまずは国学的思惟の問題の端緒であり、異文化としての他者は論理的には次の問題である<sup>35</sup>。

国学の本質を「日常性の解釈学<sup>36</sup>」とする氏の議論は、多くの学問的示唆に富むものである。氏は、近年の国学研究の問題点について鋭くこう指摘する。「近代日本では、国学はその政治性においてあるいは評価され、あるいは忌避される」。「国学批判は、ナシヨナリズム批判の思想的拠点であると見なされ、戦前戦中の日本の批判的検討の足がかりという意味になってきた。特に九〇年代の国学批判は、脱構築、あるいは国民国家批判というあらたな視点を加え、一層先鋭になされた<sup>37</sup>」と、国民国家論の影響下において、国学をめぐる議論がなされる傾向に注意を促した上で、次のような問題点を提示する。

「国民国家批判というその視点が拡張され、歴史的国学と、現代の視点からの国学的なものとの区分が明確でなくなるという側面があったのではないか<sup>38</sup>」。国民国家批判という観点から国学の内包する「政治性」にばかり目を奪われてしまうと、国学思想の本質が隠蔽される危険性すらあることを警告するのである。

#### おわりに——今後の課題

国学思想の内包する「政治性」を議論することは、幕末政治史や、近代日本社会の特質を考える際、一つの重要な分析視角であろう。しかし、その「政治性」にばかり目を奪われすぎてしまうと、その議論は、国学の内包的理解から大きく乖離していくように思われる。篤胤国学を日本民俗学の創始と見る、かつての折口、相良両氏の評価は、後の研究の新たな方向性を示したはずであるが、その後の研究史はこれを十分に継承、発展させたとは言えないのであり、「近代国家神道の前提」、あるいは「規範学」としての国学像が、近年、再生しているように思えるのである。

確かに篤胤は、『毎朝神拝詞記』において、毎朝拝むべき神や祝詞を定めたり、崇徳天皇の怨霊を鎮めるため



に、公権力による祭祀を説く等、宮城氏の指摘するように、それが篤胤国学の全てではないにせよ、「国家主義的」側面があることは否定できない。しかし一方で、その思想の中には、「近代天皇制や国家神道の先駆」という規定では捉えきれない要素も多分に含まれている。

折口、相良両氏の提言を全面的に支持しようというのでは決してない。篤胤国学を柳田民俗学の先駆とするには、今後さらなる検討が必要であることは、小島康敬氏が指摘する通りである。氏は、「柳田や折口と篤胤国学とを結ぶ二点間の距離は依然遠く、この間には研究史においてなお隙間があると言わざるを得ない。国学が民俗学として展開していった可能性を跡づけるには、そのことを示す多くの実例を掘り起こす作業が今後更に必要であろう」と述べ、篤胤国学と民俗学との間に、幕末津軽の民俗学者、平尾魯僊（一八〇八—一八八〇）を置くことで、篤胤国学が民俗学として展開する軌跡を描こうとしている。

そもそも国学は多面的な学問思想である。特に篤胤国学に関して言えば、それは篤胤が教授した学問の種類が記載された「道統礼式」や、同時代の栗園小栗永信の次のような評価からも明らかである。「叟の学は、我が神代のまなびをもととして、天文、地理、易、曆、医学に、

歌学、西洋学、何くれと此天の下にあるとあるまなびはしも、ひとつとしてえ知らざることなしとぞ」<sup>40</sup>。江戸時代の日本において、篤胤ほど広範囲な学際的研究を遺した者が他にいるだろうか。宣長国学が、篤胤に至って、ドラスティックに変化、拡大し、全く新たな展開を見せたと解釈することも可能であるが、「国学」という学統、学派を越えた、新たな知の体系として、もしくは江戸時代に行われた学際研究の一つとして、再評価する必要性すら感じる。

国学関係の膨大な新出資料が公開されつつある今、私たちはようやく本格的な国学研究のスタート地点を立てたとと言っても過言ではないかもしれない。「国学」とはいったい何であろうか。「国学者」とは誰を指すのか。私たちは今一度、原点に立ち返って考えなければならぬであろう。また、国家主義的側面、民俗学的側面、蘭学的側面、清水氏が重視する、日常生活の中で人情の機微を重視する側面等、これら多様な要素は、思想の中でどのように内的結合を見せ、論理的に整合しているのか。その論理を解き明かすことも、今後残された大きな課題である。

注

- (1) 松本三之介氏は、国学を民に服従を説く支配者側の「民心把握の武器」(松本三之介『国学政治思想の研究』未來社、一九七二年、一三二頁)とし、田原嗣郎氏は、宣長学にも潜んでいた「規範的性格」(田原嗣郎『平田篤胤』吉川弘文館、一九六三年、三〇六頁)が、篤胤にいたって、一層強化され、「現に存在する伝統的規範の保持を説く」(同書、三〇九頁)ようになった、としている。こうした一連の研究は、国学思想の中に現体制を下から支える論理を抽出しようとするものであり、同様の論点は、以下の研究書にも見られる。村岡典嗣『宣長と篤胤』創文社、一九五七年。三木正太郎『平田篤胤の研究』神道史学会、一九六九年。渡辺浩「道」と「雅び」——宣長学と「歌学」派国学の政治思想的の研究』、『国家学会雑誌』八七卷九—一二号 八八卷三—六号、一九七四年、一九七五年。野口武彦『江戸思想史の地形』ぺりかん社、一九九三年。
- (2) 『平田国学の伝統』、『折口信夫全集』二〇巻、中央公論社、一九六七年。相良亨『日本の思想史における平田篤胤』、『平田篤胤』日本の名著二四、中央公論社、一九七二年。
- (3) 沼田哲『鬼神・怪異・幽冥——平田篤胤小論』、『日本近世史論叢』下巻、吉川弘文館、一九八四年。
- (4) 飛鳥井雅道「思考の様式——世界像への試み」、林屋辰三郎編『化政文化の研究』岩波書店、一九七六年。櫻井進『江戸の無意識——都市空間の民俗学』講談社現代新書、一九九一年。南啓治『近世国学とその周辺』(三弥井書店、一九九二年)にも国学者と民俗についての論考がある。
- (5) 安蘇谷正彦『神道の生死観』ぺりかん社、一九八九年、二六〇頁。
- (6) 同書、二六〇頁。
- (7) 小池英『平田篤胤の死生観形成における方法論について』、『神道史研究』四八一—二〇〇〇年、五六頁。
- (8) 鎌田東二『平田篤胤の神界フィールドワーク』作品社、二〇〇二年。小田晋氏は篤胤の怪奇研究を現代の精神病理学の基礎と評価している。小田晋『日本の狂気誌』思索社、一九九〇年。鈴木暎一氏は、篤胤における顕幽観を考察、その独自性ゆえに幽冥観ばかりが思想の中で、注目されがちであるが、顕幽両界は互いに補完しあうものであったことを論じている。鈴木暎一『国学思想の史的研究』吉川弘文館、二〇〇二年。Harry D. Harootunian, *Things Seen and Unseen: Discourse and Ideology in Tokugawa Nativism*. The University of Chicago Press, 1988.
- (9) 子安宣邦氏は、篤胤が幽冥界を究明することで人々

に死後の安心を与えようとしたことに着目、篤胤国学の思想的意義を現世における不遇な倫理的行為者の来世での救済におく。子安宣邦『平田篤胤の世界』、『平田篤胤の世界』ぺりかん社、二〇〇一年（ただし初出は、一九七七年）。また氏は、最近、篤胤が「講説家」として登場したことを「事件」ととらえ、それが当時の知的世界に投げかけた波紋のもつ意味について論究している。「救い」と「講説」——神道講説家平田篤胤の登場、子安前掲書。

(10) 佐藤孝敏「国学者の「国」意識における「特殊」と「普遍」——『日本』の位置・呼称・優秀性の主張から」、玉懸博之編『日本思想史 その普遍と特殊』ぺりかん社、一九九七年、三五七頁。

(11) 同書、三七一頁。

(12) 同書、三七一頁。

(13) 桑原恵「古典研究と国学思想」、『日本の近世一三 儒学・国学・洋学』中央公論社、一九九三年、二九四頁。

(14) 同様の主張は、以下の論考にも見られる。平野豊雄「篤胤における国家と「青人草」」、『一橋論叢』八四—一、一九八〇年。高橋美由紀「平田神道の庶民性——その方法と構造をめぐって」、源了圓編『江戸後期の比較文化研究』ぺりかん社、一九九〇年。高橋氏は、篤

胤は「庶民のもつ土俗的宗教意識や生活倫理を積極的に汲みあげ」（同書、二九二頁）ものの、それらは結局、新たな神道思想、天皇制イデオロギーの中に吸収される結果となったのであり、「平田神道の登場は、明治の国家神道体制への大きな第一歩であった」（同書、二九三頁）と述べている。ピーター・ノスコ氏も、古への復活を願う国学者の思想的営為と近代日本のナショナリズムを重ね合わせている。篤胤は『毎朝神拝詞記』において、参拝方法を「皇居のある京都の方角を向く」よう定めたとし、「このように、国学の宗教思想は次第に当代の宗教運動の様相を呈するようになっていったが、政治に対して本来無関心であった国学が、政治思想の領分に入っていく、十九世紀にはその古い思想的秩序の大部分が終焉をむかえる」（ピーター・ノスコ『江戸社会と国学——原郷への回帰』ぺりかん社、一九九九年、二五三頁）と述べ、国学は、篤胤にいたって大きく変容を遂げ、強い政治性を帯びるようになったと指摘している。

(15) 宮地正人「幕末平田国学と政治情報」、『日本の近世一八 近代国家への志向』中央公論社、一九九四年、二一—三六頁。

(16) 宮城公子「幕末期の思想と習俗」ぺりかん社、二〇〇四年、二〇九頁。

- (17) 同書、二二六頁。
- (18) 同書、二二六頁。
- (19) 同書、九頁。
- (20) 同書、二二六頁。
- (21) 同書、二二七頁。近代国家神道は、国学ではなく、後期水戸学にその源流を持つことは、以前、論じた。拙著「国学と後期水戸学の比較——統治論における民と鬼神を中心に」、『季刊日本思想史』四七、ぺりかん社、一九九六年。
- (22) 小野将「『国学』の都市性——官長学のいくつかのモティーフから」、鈴木博之・石山修武・伊藤毅・山岸常人編『都市文化の成熟』(シリーズ都市・建築・歴史六、東京大学出版会、二〇〇六年、四〇二頁)。
- (23) 岸野俊彦『幕藩制社会における国学』校倉書房、一九九八年。その他、三河地方の国学者関係史料は、田崎哲郎『三河地方知識人史料』(岩田書院、二〇〇三年)に詳しい。
- (24) 山下久夫「篤胤のトポス——『大扶桑国考』の記述より」、『日本文学』一五〇—一〇、二〇〇四年、五二頁。
- (25) 遠藤潤「国学の天体論と神代——中庸・篤胤の論とそれにかかわる論争を焦点として」、『明治聖徳記念学会紀要』四〇、二〇〇四年、四四頁。
- (26) 同書、四五頁。
- (27) 伊東多三郎「国学と洋学」、『近世史の研究』第二冊、吉川弘文館、一九八二年(ただし初出は、一九三七年)。鮎澤信太郎「洋学による平田篤胤の地理思想」、『地理学史の研究』愛日書院、一九四八年。ドナルド・キーン「平田篤胤と洋学」、『日本人の西洋発見』中央公論社、一九六八年。服部敏良「平田篤胤の医学」、『江戸時代医学史の研究』吉川弘文館、一九七八年。平野満「平田篤胤の蘭馨堂入門と蘭方医学研究」、『日蘭学会会誌』一〇—一、一九八五年。同「吉田長淑——蘭馨堂門人の拡がり」、愛知大学総合文化研究所編『近世の地方文化』名著出版、一九九一年。中川和明「平田篤胤の蘭学観」、『国史研究』一〇〇、一九九六年。拙著『徳川後期の攘夷思想と「西洋」』風間書房、二〇〇三年。
- (28) 詳細は、図録『明治維新と平田国学』(国立歴史民俗博物館、二〇〇四年)、宮地正人編『平田国学の再検討』(『国立歴史民俗博物館研究報告第一二二集、二〇〇五年』を参照のこと。また気吹舎の著述出版に関する研究として、吉田麻子「平田篤胤『古今妖魅考』の出版事情」(『書物・出版と社会変容』一、二〇〇六年)がある。
- (29) これらの資料を最大限利用して、ロシア危機が篤胤

国学の思想形成、展開に及ぼした影響については、かつて小論において検討したので、参照されたい。拙著「平田篤胤の思想形成とロシア危機」、『人文論集』二〇〇六年。

(30) 宮地正人「伊吹迺舎と四千の門弟たち」、米田勝安・荒俣宏編『別冊太陽 知のネットワークの先覚者 平田篤胤』、平凡社、二〇〇四年。

(31) 凶録『二十一世紀の本居宣長』朝日新聞社、二〇〇四年。中澤伸弘『やさしく読む国学』戎光祥出版、二〇〇六年。また最近、宣長を扱った研究書も次々と刊行されている。東より子『宣長神学の構造——仮構された「神代」ペリかん社、一九九九年。金沢英之『宣長と三大考』笠間書院、二〇〇五年。田中康二『本居宣長の思考法』ペリかん社、二〇〇五年。長島弘明編『本居宣長の世界——和歌・注釈・思想』森話社、二〇〇五年。

(32) 前田勉『近世神道と国学』ペリかん社、二〇〇二年、一四五頁。教育史の観点から、鈴屋社中の形成と展開、教育内容、国学者の教育活動のもつ教育史的、歴史的意義について考察した研究書として、山中芳和『近世国学と教育』（多賀出版、一九九八年）がある。

(33) 前田前掲書、一四八頁。

(34) 前田勉『兵学と朱子学・蘭学・国学——近世日本思

想史の構図』平凡社、二〇〇六年、四二頁。

(35) 清水正之『国学の他者像——誠実と虚偽』ペリかん社、二〇〇五年、三頁。

(36) 同書、一頁。

(37) 同書、二二九頁、二頁。

(38) 同書、二頁。

(39) 小島康敬「幕末期津軽の民俗学者・平尾魯僊——平田篤胤と柳田国男の間」、『年報・市史ひろさき』一〇、二〇〇一年、一三頁。

(40) 「道統礼式」、前掲凶録『明治維新と平田国学』、一四頁。「道統礼式」には、「古道学」、「曆学」、「易学」、「軍学」、「玄学」が挙げられている。森銑三「平田篤胤雑記」、『森銑三著作集』七、中央公論社、一九七一年、二四六頁。

(兵庫県立大学准教授)